

○資料編

- 資 1. 志津川中学校 教員を対象とした研修会資料
- 資 2. 志津川中学校 生徒を研修とした研修会資料
- 資 3. 戸倉中学校 全校復興ワークショップ グループワーク成果
- 資 4. 戸倉中学校 第2回授業 説明資料
- 資 5. 戸倉中学校 第2回授業 ワークシート
- 資 6. 戸倉中学校 新潟訪問 ワークシート
- 資 7. 最終報告会発表資料

被災した子どもたちのその後 —北海道南西沖地震を経験した子どもたち—

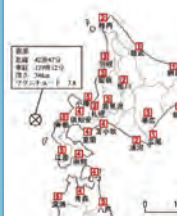
北海道大学大学院理学研究院
附属地震火山研究観測センター
定池祐季



北海道南西沖地震

発生日時：
1993年7月12日22時17分
マグニチュード：7.8
最大震度：5（寿都、江差など）
※奥尻島の推定震度は6

死者・行方不明者：230名
（うち奥尻町：198名）
重軽傷者：323名
（うち奥尻町：143名）



気象庁資料より作成

津波、火災、斜面崩落、
液状化現象などが発生



我が家に残っていた写真



振り返ってみると

- ・ 当たり前が続くと思っていた「明日」が来ないこともあると知り、むなしくなった。
- ・ 「被害がなかったこと」が後ろめたかった。
- ・ 奥尻中学校の場合は、荒れていた学年がおとなしくなった。「反抗している場合じゃない」ということがわかっていたように思う。
- ・ 余震を笑い飛ばすような、空元気なところもあった。
- ・ 学校祭の準備、合唱のように、みんなで何かをするということが、よかったと思う。



被災3ヶ月後の青苗地区



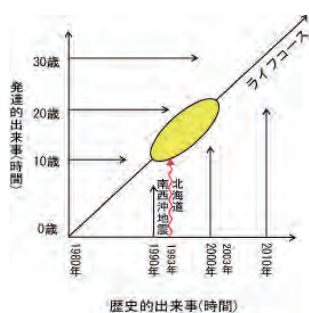
1993年10月9日撮影 定池家所蔵

災害から10年後の青苗地区



2003年10月 定池撮影

奥尻の子どもたちのその後

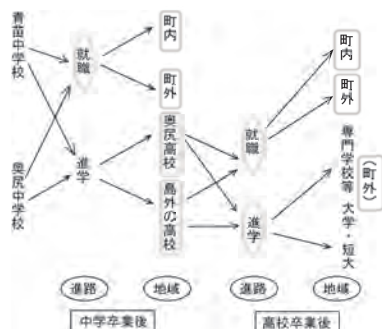


奥尻町の学校教育

- 2011年現在、小学校が3校、中学校が2校、高校が1校。
(2003年3月末で稲穂小学校が宮津小学校に統合)



子どもたちの進路選択



中学卒業後の進路選択

- 大半の生徒は奥尻高校に進学
- 将来的に島内に就職しようと考えている生徒は奥尻高校に進学する傾向にある
- 島外の高校の主な進学先は、函館市や札幌市、およびその近郊
- 自衛隊員の子どもは、親の転勤を見越した進路選択を行う傾向がみられる

奥尻高校卒業後の進路選択

- 1994年度以降は進学する生徒が増加した。
- 進学先は従来は専門学校が多かったが、近年は指定校推薦枠の拡大もあり、大学に進学する生徒が増えてきている。
(2002年時点)



災害後の進路選択の状況（～2002年）

- 基本的に、親は子どもが望む進路をかなえようとしていた。
- 災害よりも、生徒自身の学力が進路選択に影響していた。
- 一部、経済的な事情で進学をあきらめたケースも見られた。



災害が子どもたちの 進路選択に与えた影響

- (1)災害により親の職業が変わったため、就職をする際の選択肢が変化した。
- (2)災害により家族が亡くなったため、就職時の居住地選択が変化した。
- (3)被災経験から将来の目標を見出した。
- (4)災害により家族が亡くなったため、就職時の職業の選択肢が変化した



被災者として見られること

- 「奥尻出身です」「奥尻に住んでいました」→「地震のときどうだったの？」
- 悲惨な経験→マスコミによる取材過多→マスコミに対する不信
- 面接で災害経験を話題に
- 災害の話題で友達を作る
- 「被災者だと思っていない」



学校教育における防災教育の現状①

- 平成8-9年度にかけて防災教育推進委員会を設置し、とりまとめの冊子を作成
- 新任教員向けの、津波館見学会を実施



防災教育推進委員会による資料集



津波館



奥尻島津波館

〈施設概要〉

- 場所：北海道奥尻町青苗地区（旧5区）
- 平成12年10月完成。翌13年5月オープン
- 町営、奥尻町教育委員会の管轄
- 展示品：オブジェ、作文・詩、映像、遺跡出土品、写真パネル（後から設置）



津波館外観（2008年8月撮影）





学校教育における防災教育の現状②

- 地震避難訓練
- 上記訓練と抱き合わせの防災学習
- 「総合的な学習の時間」を利用した、北海道南西沖地震に関する学習



高台への避難訓練（青苗小学校）



学校教育における防災教育の課題

- 防災教育への取り組みの有無は現場の教員の裁量に任されており、継続した取り組みは、避難訓練となっている。
- 被災経験のない教員が防災教育を進める助けとなりうる資料が作成されたものの、現在は活用されておらず、防災教育を実施する教員の負担は増大している。
- 被災後の時間の経過に伴い、被災経験のない教員、児童・生徒、保護者が増加する中、どのように過去の被災経験を継承していくかという方向性を定めることが求められている。



阪神・淡路大震災を通じて



神戸市消防局予防部予防課
地域防災支援係 竹中 邦明



阪神・淡路大震災の概要

1 発生

日時	1995年1月17日(火)5時46分
深さ	約16km
規模	マグニチュード7.3
震度	7
特徴	大都市直下型 横揺れと立揺れ

2 被害(市外含む)

死者	6,434人(含行方不明2人)
負傷者	43,792人
全・半壊棟数	249,180棟







兵庫県立御影高等学校にて



1995. 01. 17 05:47a.m.

写真提供

兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校

浅堀 裕 教諭(震災時御影高校教諭)





まちを自分たちで守る

神戸市民による自主防災組織の立ち上げ(平成7年～)

「神戸市防災福祉コミュニティ」

通称: BOKOMI エリア: 小学校校区 ※市内191団体

防災活動(防災訓練など)

福祉活動(地域の祭りなど)

日ごろの福祉的な活動を防災につなげる

自治会	事業所
老人会	青少協
婦人会	消防団
PTA	その他
民生児童委員	



震災時の恩返し
震災経験と教訓を国内外へ





何年目？	2年目：高校入学 高校入学 5年目：高校卒業 高校卒業 将来は？	2年目：高校入学 高校入学 5年目：高校卒業 高校卒業 将来は？
何年目？	2年目：高校入学 高校入学 5年目：高校卒業 高校卒業 将来は？	2年目：高校入学 高校入学 5年目：高校卒業 高校卒業 将来は？

自分**は**みんながうに暮らしてると。

町・**は**倉と、どう関わってる。

みんな**が**なになにになってる。

みんな**が**なになにになってる。



2年目：高校入学
高校入学

5年目：高校卒業
高校卒業

将来は？

2年目：高校入学

5年目：高校卒業

将来は？

- ・プールでちゃんと泳げるようになる
- ・ボランテニア活動をする
- ・マラソン大会がない高校に行く
- ・ホームヘルパーの級をとる
- ・たくさん友達をつくる
- ・高校に入ったら帰ってこない

- ・自衛隊に入る
- ・どっか住み心地のよい所に行く。志津川に帰ってくるのは年4～5回位。アルバイトをしながら職を探す
- ・大学に行く！
- ・勉強しに韓国へ行く
- ・大学に行きながら音楽活動をする
- ・遊びに中国に行く
- ・1年程、お兄ちゃんと暮らす

- ・将来弁護士になる
- ・目指せ、特攻隊！
- ・将来、歌手に！
- ・高校卒業後、専門学校に行ってトリマーの仕事に就きたい
- ・25歳までに三曹に昇任、家を借りる
- ・看護学校に行く
- ・役場職員になって、のんびりと町民（市民）たちと交流を深めたい（志津川ではない）

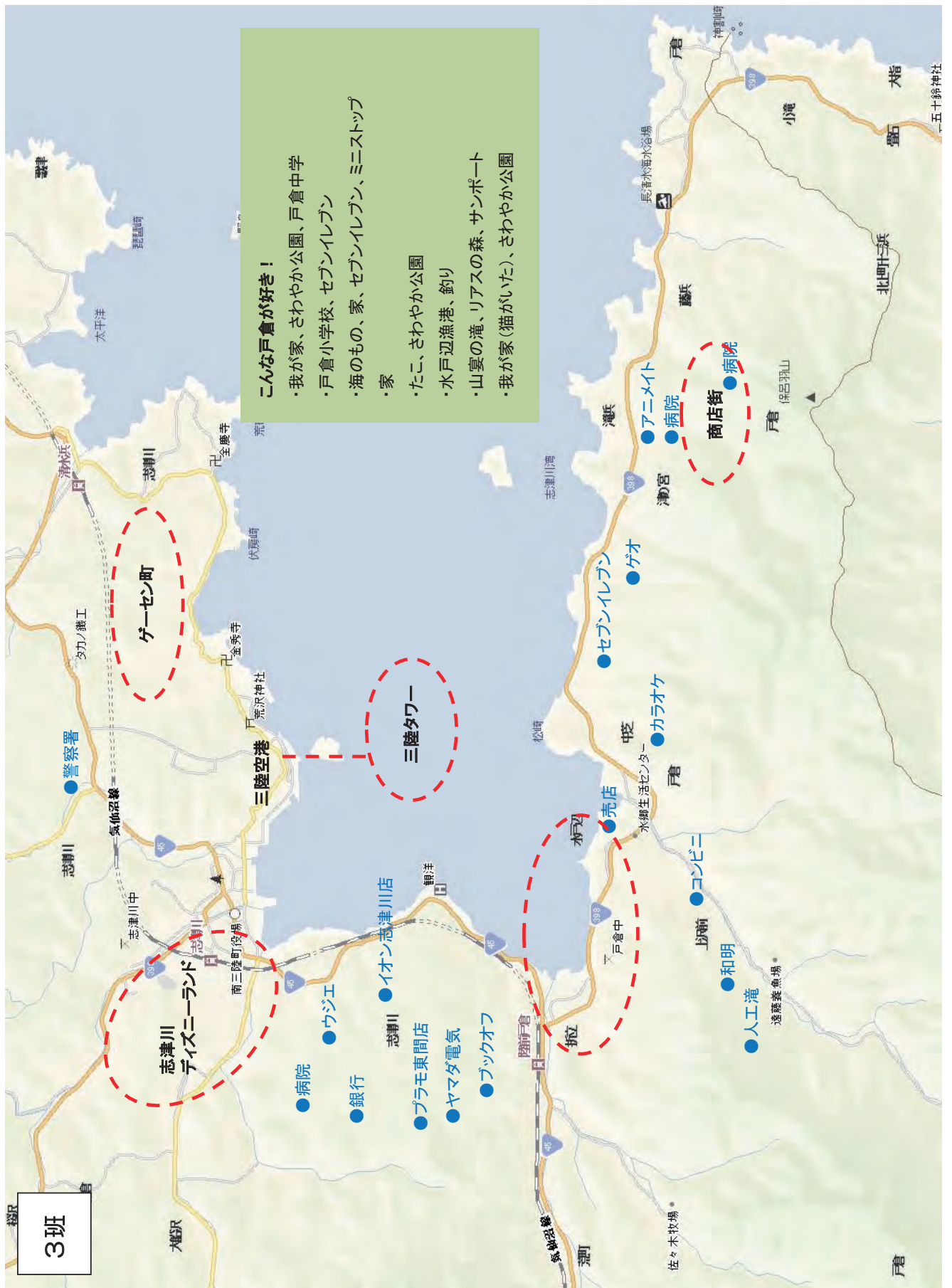




何年目？	1年目：	5年目	10年目	2班
自分はいくらに暮らしてると。 町・戸倉で、どう関わってる？	戸倉： 南三陸： 県内： 県外： 国外：	・戸倉にいる 南三陸で働く ・多分宮城県内にいて 安定した職業につき、安 定した生活をおくっている ・平凡に暮らす（県内） ・人の役に 立つ仕事 （県内） ・津波が絶対ない場所 キレイな場所でのんびり 暮らしたい。ヨガをしたり 女に磨きをかける。働く。	・都会で生活 ・隠居。仙人のような	
みんなが元気に暮らしてると。 みんなが元気で暮らしてると。	こんな町になってほしい！！ ・今までと同じように復旧するので はなく、より住みやすいまちに。一 ・欠点を改善すべき ・今まであった店や・道・植物・ 仕事・住宅 ・ウジェスパーパーを建てる ・仕事をつくる・増やす ・道路をなおす ・再建 信号をつくる	私達にできそうなこと ・チラシづくり ・商品開発の手伝い ・いろんな人に伝える ・ボランティア ・ホームページをつくる	目標：いつも通り普通の生活をとります ・いつもどおり「普通」 ・いつもどおり「平和に」 ・震災前のようにキレイになっていてもとどおりに、 それ以上に発展 ・良いところもどるようにしてほしい ・あんまりかわらないでほしい ・今よりは“少し”発展 ・今は地域を離れている人も戻れる震災に強いまち に！ ・ジャスコじゃなくてサンポートで十分	



何年目？	2年目：志津川中学校に移動 志中に移動 3年目：高校入学 高校生活 4年目：大学希望 or 自分の道へ 5年目：大学卒業 or 自分の道へ 6年目：高校入学・高校生活 or 自分の道へ 7年目：成人式 成人式 8年目：結婚 それぞれの仕事へ 9年目：結婚 それぞれの仕事へ 10年目：結婚 それぞれの仕事へ	1年目：ゲーセンなど遊ぶところが 増大 2年目：瓦礫がかたづいて、アパート 等が少しずつ建てられていく 3年目：瓦礫が減ってきて建物が 増える 4年目：3年目までに瓦礫が 無くなる 5年目：戸倉にコンビニが できる 6年目：子ども遊び場が できる 7年目：瓦礫の撤去が終わる 8年目：カラオケができる 9年目：セイムスができる 10年目：ウジェスパーパーが できる 11年目：ワルツができて、ア パート 12年目：ワルツができて、ア パート 13年目：ワルツができて、ア パート 14年目：ワルツができて、ア パート 15年目：ワルツができて、ア パート 16年目：ワルツができて、ア パート 17年目：ワルツができて、ア パート 18年目：ワルツができて、ア パート 19年目：ワルツができて、ア パート 20年目：ワルツができて、ア パート
------	---	---



こんな戸倉が好き！

- ・我が家、さわやか公園、戸倉中学
- ・戸倉小学校、セブンイレブン
- ・海のもの、家、セブンイレブン、ミニストップ
- ・家
- ・たこ、さわやか公園
- ・水戸辺漁港、釣り
- ・山宴の滝、リアスの森、サンポート
- ・我が家(猫がいた)、さわやか公園

3班

何年目？

自分ばはんがうに暮らしてると。
町・戸倉で、どう関わってる？

仕事をしている

- ・どっかで働いているとか家で漁業関係の仕事をしている
- ・戸倉にはいるかわからない。多分仕事をしているとは思いますが
- ・大学を卒業してどこかで仕事をしている
- ・多分、仕事をしている
- ・戸倉にはいないかもしれないけれど、南三陸町内にはいるかもしれない

イベント・催し

- ・南三陸の夏祭りなどの行事に参加する
- ・お正月あたりにとか。お墓参りに帰ってくるとか
- ・もし家を出ているなら何かあるときには帰ってくる
- ・小学校か中学校で野球の指導者をする
- ・何らかの行事には帰ってくる
- ・お正月やお盆などに帰ってくる
- ・もし戸倉外にいるならお正月や潮騒踊りのときには帰ってくると思います
- ・年に1回は戸倉に帰る。行事などがあれば帰ると思う
- ・懐かしくなってきたときに帰ってくる



戸倉に人を呼ぶために

- ・自然豊かなところをアピールしまくる
- ・イベントなどで仕事を増やす
- ・海をみてもらう
- ・町のブログみたいなものをつくる
- ・寄付を集め災害にあった自然環境を戻す
- ・海産物（海や山など）のアピール、売り出し、漁業体験などをするなど
- ・いいところをアピールする
- ・ホテル観洋をリフォームする
- ・祭りをもつとする
- ・海産物を売り出す
- ・海を体験できるコーナー



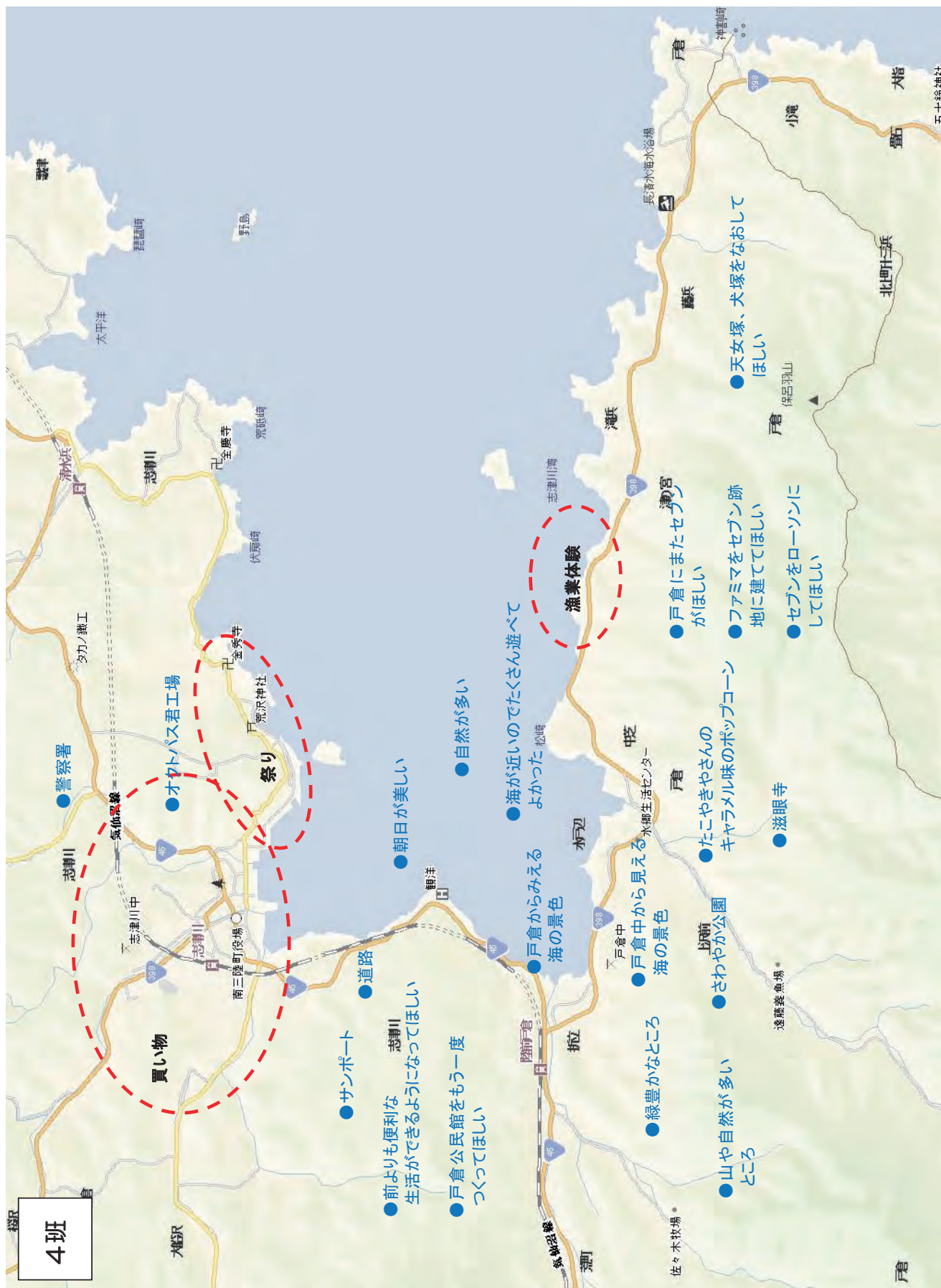
・オクトパス君を大量生産

○戸倉に人とよぶために世界へのアピールポイントは？

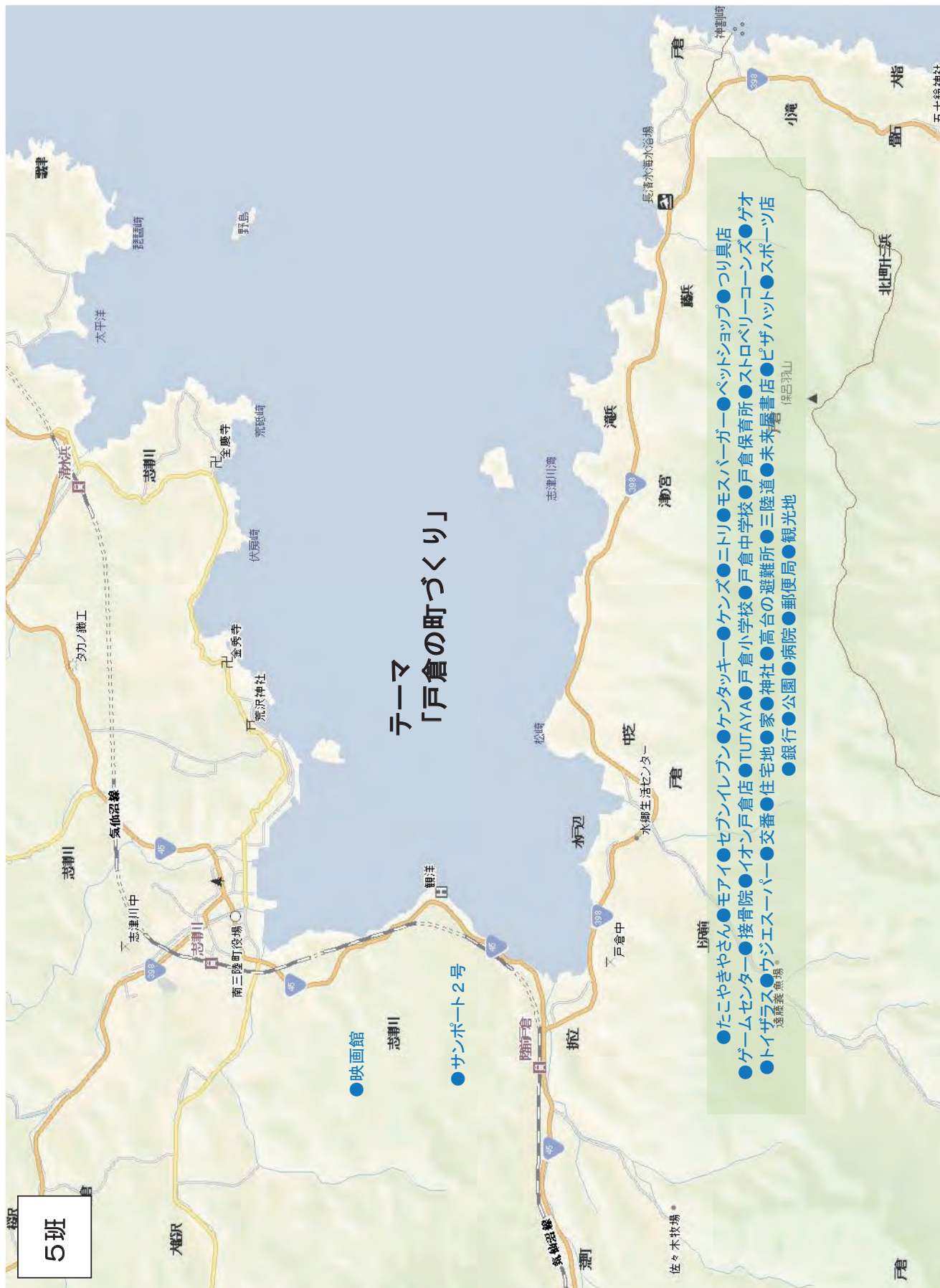
- ・海産物 特産物
- ・海を見てもらう
- ・漁の体験ツアー、植林体験
- ・町のブログをつくる
- ・イベントを増やす

○戸倉とどんなにかかわりをもっているか

- ・野球の指導者
- ・お正月
- ・夏祭り
- ・寺



何年目？	1年目： 13歳 5年目： 18歳 10年目： 23歳 5班
自分はんちやうつに暮らしてゐて。 町・戸倉と、ちやう関わってゐて。	志津川中学校に行く 町に活気が戻ってくる 教科書に載っている 戸倉中学校卒業 志津川高校入学 南三陸町には住まないけど毎年お墓参りにはくる。 今回の災害が教科書に載る 南三陸に町がたちはじめてくる 南三陸町に戻ってきて住む 南三陸町に公共施設が建っている 南三陸川に頑丈な防波堤ができる 瓦礫がなくなり町が綺麗になっている 人や町のために役に立つことをする 町が復興して海が綺麗になって魚が戻ってくる もともとどおりの明るい町になる 
いんなあひつゐがでまいたいし いんなあひになつてはうじ。	つくるもの： 前と一緒にの家 震災で残った建物を残してほしい 新しい建物・自然 鮭が戻ってこれるような川 魚を養殖するところ なくすもの： 壊れている建物 溜まっている水 瓦礫・雑草 枯れている木 堤防の高さは今回の震災時の津波高さ+5m位 震災のことを伝える公園・大型スーパ― 養殖場・森林・学校・家・川 を忘れないために残しておく 町民が元気な町・戸倉の有名な料理 後世に伝える博物館 防波堤を作りいっばい釣りができるように 公園・遊び場・つり具店・色んな店 無料バッチェイングセンター・イオン 



何年目？	5年目（18歳）	10年目（23歳）	6班
自分ばいんがらうに暮らしてゐ。 町・戸倉ぶ、どう関わってる。	・高校生（志津川高校？） ・戸倉に住んでいる ・高校生になる ・多分仙台に住んでいる（仙台の親戚においでといわれた） ・高校3年生（気仙沼高校？！）普通に生活 ・おそらく気仙沼市にいる イベント・催し ・南三陸の夏祭りなどの行事に参加する ・お正月あたりとか。お墓参りに帰ってくるとか ・もし家を出ているなら何かあるときには帰ってくる ・小学校か中学校で野球の指導者をする ・何らかの行事には帰ってくる ・お正月やお盆などに帰ってくる	・ゲームをつくる仕事をしている ・気仙沼地域の学校で学年主任 ・同じ小泉に大きな家をたてて犬を飼って住む ・東京にいてゲーム関係の仕事につきたい ・仙台か戸倉にいる ・南方に住む ・海の仕事についている ・海で漁師 もし戸倉外にいるならお正月や潮騒踊りのときには帰ってくると思います 年に1回は戸倉に帰る。行事などがあれば帰ると思う 懐かしくなったときに帰ってくる 	6班
いんなあぢわになつてほしい いんなあぢわができたらいい 	今のままがいいもの ・祭り ・戸倉にある島 ・南三陸の魚 ・海 ・志津川湾 ・森 ・みんなの素直さ ・のり、わかめ、さけ、あわび、うに、たこ ・がんばれ 心 キモチ ・われらの力 ・自分の家 ・モアイ ・天女塚、狗塚、神桂の石 ・海をきれいに 山をきれいに	新しくできるといいもの ・アニメイト ・病院 ・ゲーセン ・スーパ ・GEO ・ジャスコ（2階か？）、イオン ・しまむら ・ツタヤ ・新しいまち ・ファミマ、サンクス ・JRの駅 ・まち、ひと、セール、賑わい なくなつてほしいもの ・がれき ・有害物質 ・悪いものすべて ・高級マンション（実家あり） ・高層ビル ・タイムマシン ・プラネタリアウム	

戸倉中学校

復興まちづくりについて

2011/12/16



自己紹介



東京下町のまちづくり協議会お手伝い



2012/3 被災農村との仲間作り交流



地域の祭りにて
自治会の障がい者避難訓練



復興まちづくりについて考える

- 10月27日 全校ワークショップ
 - 内容: 私達の将来と町の復興(戸倉の好きなところ・今後10年間の私達・10年間の町の様子)
- 12月16日 3年生授業
 - 内容: 他の被災地の被害と復興 クロスロードゲーム
 - 関心テーマを見つける
- 2月頃
 - 内容: テーマを深めるグループワークと提案
 - 10年間の町の復興と関わりについて、再度まとめてみよう

○ 戸倉地区の復興を考えるワークショップ



各グループの意見



グループ	意見
グループ1	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ2	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ3	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ4	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ5	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ6	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ7	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ8	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ9	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。
グループ10	被災地の復興は、まず生活の基盤を整えることが大切。特に、水と電気の供給を確保することが重要。

今日の授業の予定

- 1) 他の被災地の被害と復興について (30分)
 - 北海道南西沖地震 (奥尻島)
 - 新潟県中越地震
 - 阪神・淡路大震災
- 2) クロスロードゲーム (50分)
 - 3つの質問に答えて、復興について考えよう
- 3) ワークシート記入・ふりかえり (20分)

他の被災地の被害と復興について

北海道南西沖地震

北海道南西沖地震(奥尻島)1993



7月12日午後10時17分

津波の高さ(波高)は、稲穂地区で8.5m、
奥尻地区で3.5m、初松前地区で16.8m

北海道南西沖地震(奥尻島)1993



北海道南西沖地震(奥尻島)1993



高台の住宅地
(移転後)



高台への避難路



海近くの嵩上げ住宅地

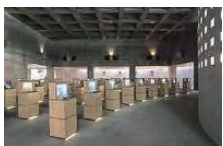


海近くの避難施設

メモリアル (奥尻島津波館)



外観



復興過程の再現模型など

もの・文献等も含め、
災害資料の収集は殆ど行われていない。



慰霊のためのモニュメント

15

津波災害の伝承・記録・発信



津波被害の資料収集や展示は世界的にも少ない
→建物の建設だけでなく、展示資料などの収集が必要



奥尻島津波館



稲村の火館
(津波防災教育センターも併設)

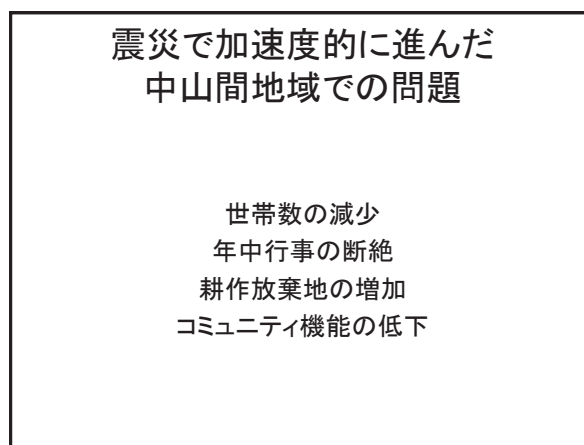
インド洋津波
インドネシア・アチェ
2011年開館
(災害遺物の収集未実施)



16

新潟県中越地震





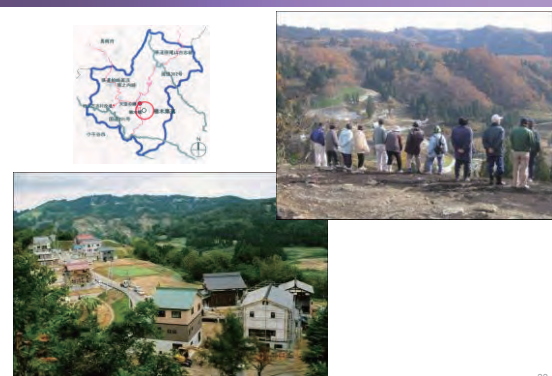
復興過程における集落移転の合意形成と生活再建（中越地震）



集落移転の課題

- ・集落全部で移転した集落と、一部分だけ移転したところでは、地域のつながりが維持されたところとそうでないところがある
- ・移転した世帯よりも、集落に残った世帯が生活の維持が大変
- ・全世帯が移転したところは、集落で話し合って決め、一部移転したところは役場が世帯ごとに聞いてまわったところが多い
- ・移転地が隣の集落になったりした場合の調整が難航することもある。
- ・移転した土地に住宅を建てたローンの負担が大きいと感じる世帯が多い

集団移転（旧山古志村 檜木集落）小規模住宅地区改良事業



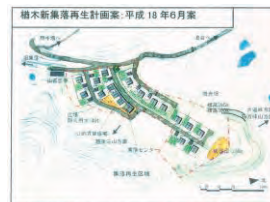
33

集団移転（旧山古志村 檜木集落）



実際に地縄を張って集落の配置図を検討するワークショップ

計画づくりに一工夫することで、住みやすい集落に。



34

住まいの再建の工夫

払下げ可能な復興公営住宅

同じ集落の人達が住む場所につくった公営住宅

地元の材料を使用したり、地域に溶け込む住宅



36

福祉避難所(南三陸町)

生活機能が低下した高齢避難者を地域のケアマネジャーが探し出し福祉避難所が受け入れる取り組み。通常130名程度の高齢者を対象としたデイケアサービスを提供する施設のサービス中に地震が発生

ピーク時23名受入れ 4/15現在では7名の高齢者とその家族12名が生活町外二次避難をした高齢者には、ケアマネジャーが避難先ペットを手配



歌津老人福祉センター
デイケアセンター福祉避難所



(避難者・施設管理者の許可を得て撮影)

阪神・淡路大震災



震災当日6時 六甲台より



震災当日7時 六甲台より



震災当日8時 六甲台より





神戸市役所の被害 ワンフロア全体がつぶれた



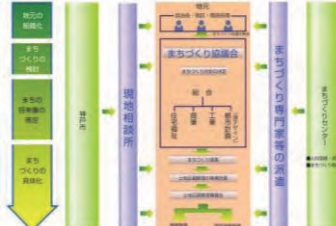


まちづくり条例
(1981年制定)で
まちづくり協議会による、
「まちづくり構想」の
市長への提案権

2012/3/5

まちづくり協議会 の取組み

震災後、神戸市だけで
100程度のまちづくり
協議会が活動。





六甲道地区／六甲町線（幅員17m）に整備されたせせらぎ

ワークショップ

震災から5年後
平成17年9月1日に市営の復興まちづくりで、六甲住宅の水漏れ被害で「せせらぎ」を計画し、幅員17m、高さ6mのせせらぎを手作りしてつくり、毎分100リットルの水を3/4の圧力で流し、結果1%の勾配がせせらぎといわれるような流れに変わりました。



被災には、被害などを防いでくれる水も大切
水もつくりました



産業・住宅・くらし・地域の復興



阪神・淡路大震災時の避難所

避難所（1995.1～1995.8）
最大で1,239ヶ所 319,638人



メモリアル (神戸市東遊園地公園)



神戸ルミナリエ



1・17の集い



1・17希望の灯り



阪神・淡路大震災 慰霊と復興のモニュメント
神戸市内外の震災犠牲者の名前が掲示

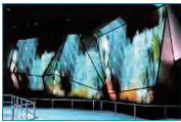
語り継ぐ(人と防災未来センター)



外観



展示:被害や避難生活などの写真・もの



体感シアター



原寸ジオラマ

55

語り継ぐ(人と防災未来センター)



資料室



減災
ワークショップ



ボランティア・語り部

2002年4月開館
・入館者(平成22年)502,865人
・運営ボランティア:163名(語り部44名、
語学48名、手話2名、展示解説69名)
・震災関係一次資料数:177,027点

<資料収集>
・兵庫県による資料収集 - 1995年12月～21世紀ひょうご創造協会に委託
・資料収集員3名による資料収集の開始 - 2000年～2002年 兵庫県による大規模震災資料
所在調査(400名の資料収集員)

56

語り継ぐ(サイン 断層保存等)



奥尻島(堤防)



神戸メモリアルパーク

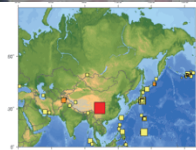


北沢震災記念公園(断層記念館 断層上の家を保存・屋内も公開)

57

四川大地震

2008年5月12日 14時28分(現地時間)
四川大地震(汶川地震) 震源地 映秀鎮



死者は約9万人、震源地の汶川映秀鎮の死者、行方不明者は全人口1万人の約8割の少なくとも7,700人に上った

四川大地震 北川县城 まるごと都市移転・震災遺跡

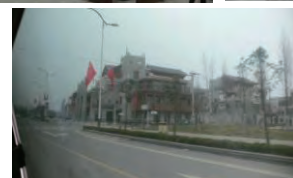
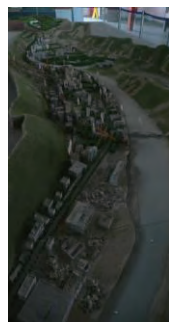




四川大地震 北川县城 まるごと都市移転・震災遺跡



四川大地震 北川县城 まるごと都市移転・震災遺跡



南三陸町の復興まちづくり

南三陸町 復興まちづくり



学識者による計画策定会議
(復興計画をとりまとめる)

事業計画

復興計画



市民による計画策定会議



全町民への意向調査

・公営住宅はいくつ必要か
・どのくらいの面積造成するのか



地区ごとの市民懇談会
(地区ごとのまちづくり方針について検討)

地区ごとのまちづくり検討
(具体的な移転場所や土地の取引などについて話し合う)

地域懇談会 23箇所で実施 (町内の各施設 登米市の避難所など)



ひとりひとりの意見をまとめていく。

集落での話し合い

- ・地元地権者との打合せ
- ・事業手法の制度についての説明
- ・道路整備と集落再建

具体的な移転先の土地も相談。



町民アンケートの結果



今後の住まい

■今後の居住場所を選択する際に重視すること
「津波に対する安全性」を60%で最も多く、次いで「病院や福祉施設の近いところ」(44%)や「買い物などが便利なおところ」(31%)が多い。

■今後の居住意向

- ・全棟で「今まで住んでいた敷地」に再建したい世帯は1割にとどまる。
- ・大規模半壊・半壊では、半数以上「今まで住んでいた敷地」が半数以上となる

■今後の住まい
・「持家（一戸建）」が80%で最も多く、次いで「公営住宅」（12%）が多い。
・志津川地区で「公営住宅」（19%）が多い。

災害に強いまちの要素

■自然災害に強いまちづくりのために重要だと思うこと
「住まいの高所への配置」が60%と最も多く、次いで「学校・病院・庁舎などの高所への配置」(58%)や「水道・ガス等のライフラインの強化」(35%)が多い。

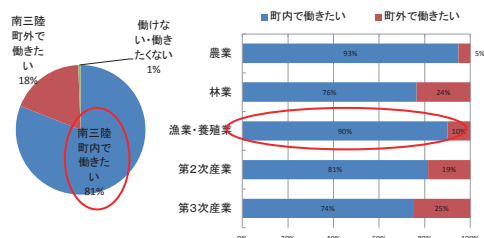
希望する仕事場

■今後の仕事

- ・町内での就業意向が81%。
- ・第1次産業のうち、「農業」の継続意向は93%、「漁業・養殖業」の継続意向は90%。

希望する仕事場

■今後の仕事
・町内での就業意向が81%。
・第1次産業のうち、「農業」の継続意向は93%、「漁業・養殖業」の継続意向は90%。

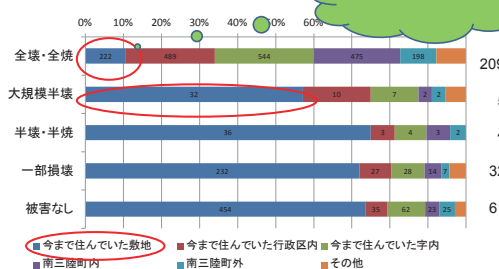


南三陸町 居住場所の希望

■今後の居住意向

- ・全棟で「今まで住んでいた敷地」に再建したい世帯は1割にと
- ・大規模半壊・半壊では、半数以上「今まで住んでいた敷地」に再建したい世帯は1割にと

現地再建 10%
町内移転75% 町外10%



クロスロードゲーム

ふりかえり

ワークシートに記入しましょう

資料5 第二回授業ワークシート

お名前

1) 今日の話や、クロスロードゲームで、一番印象に残ったことは何ですか。
それはなぜですか？

2) 10年後の自分は、<どこで>、<どんな暮らし（仕事など）>をしている
と思いますか？

3) 10年後、戸倉・南三陸町とどんなふうに関係がつながっていると思いま
すか。

4) これからの町の復興について、知りたい・調べたい、やってみたいと思う
ことは何ですか

5) 今、一番したいことはなんですか。今、一番心配なことは何ですか。

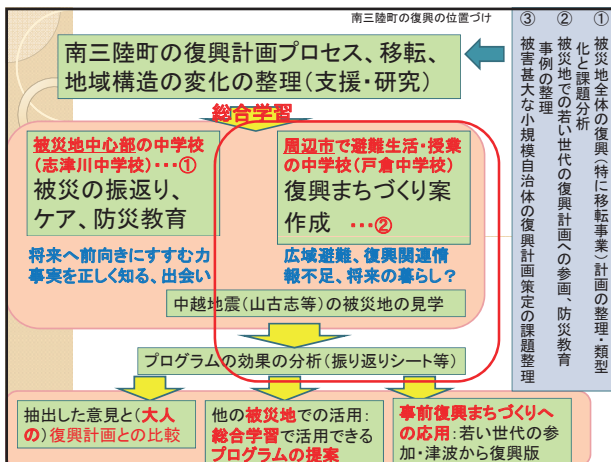
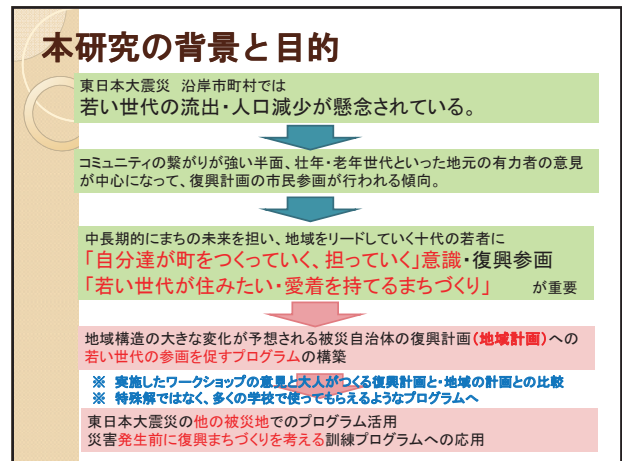
山古志の復興公営住宅（自ら再建が難しい世帯）を見学して感じたことを書いてください。

戸倉での（自分で再建する世帯の）住宅や、復興公営住宅は、どんな形式やデザインが良いと思いますか。場所はどこ（各集落、便利な市街地のなか等）が良いと思いますか。

山古志の集落の復興のお話を聞いて、印象に残ったことを書いてください。

山古志の集落の復興のお話の中で、南三陸町や戸倉地区の復興に活かせるようなアイデアがあったら、書いてください。

高齢者や障害者などが、安心して住めるような復興まちづくりには、どんなことが必要だと思いますか。
若い世代や、小さい子供がいる世帯が、安心して楽しく暮らせるようなまちづくりには、どんなことが必要だと思いますか。
地震の後、集落や地区を離れた人々と、もとの土地や人間関係のつながりについて感じたこと、考えたことを書いてください。
その他、今日見たことや感じたことなどをメモしておいてください。



○ ステップ1：戸倉地区の好きなところは？

住んでいた戸倉地区のことと、自分達の思い出を語る。

○ ステップ2：みんなのカレンダーづくり

これから10年、どんな暮らしをしたいか？
震災が大変な日々の中でも、将来の自分のイメージする（夢見る）場所！

○ ステップ3：まちのカレンダー・地図づくり

これから10年、何ほど変わっていくでしょう？
町民あかり屋も変わらないかなとも思いますが、まちの復興が
どんなふうにすすむかも、イメージする。

残る人は便利な施設、出る人は変わらないまちを求める傾向。全体として「こうしてもらいたい」「こんな施設がほしい」要望多。

○ Step1: 高校中の勉強や、夜更しなどの事件や出来事
自分の学校の勉強と夜更しはどうか？ 実際の夜更しのやりとをたどる

○ Step2: 夜更し通達のプレイング、カードゲームから本音の露顔
「オサジノの質問」あえて明確な返答で受けかかると

生半か育ったのは大層だからと、高校を卒業したら都会に行きたい。
東京行とかわかんないよ！と。でも、若い世代に魅力的な都会にしたいと。。。

○ Step3: ワークショップでよりかえり
かえり本案件の議論にたどると、自分の意見をもう一回考えてみる

あなたは高校3年生です。
両親が「町に残って、地域の復興の力になるべきだ」といいます。
町に残りますか？

B班 (No 1名, 他は Yes)

A班 (Yes 1名, No 6名)

No 協力したけど、自分のやりかたにはがある。悩むわい。
No 自分の夢の夢の夢に就きたいから、ボランティアでくれば良い。
No 何もできない。津波がわからず、住むのは嫌だ。
No 「町に決められない。東進！」
Yes 幸災に感傷は無理なので、高校があの若い方が必要だから、自分のエンジャにないから。」

○ 感想 (書き溜りシートより)
この質問は迷った。実際に親から言われたら悩むと思う。
すごく悩んだけど、自分のやりかたのすべからず、自分のやりかたも考えた。

○ B班 (Yes 4名, No 3名)

Yes 全員 No だとして、若い人が誰もいなくなり、やる人がないから。」
No すでに買った人でないとも、他の風景がかなわないから、あなねば！
Yes 今の風景は、残らないで町のなかでいかにとまってきたから。阪市から車で通えば、がれきを片付たり、まちの計画をええれる。」

A班 (Yes5名、No 2名)

「この質問、めっつや、むずかしい」

Yes! 被災児は「利便性」をみずからだんだん慣れるはず。医療に感謝したい!

No! (大断難する)と過剰な不安をもった整った環境で育った子は津波の被害で何もかもらぶことになる。

No! 自らの老後の心配が理由で環境! 高齢者は前の感覚が変化する。

「前」に出るなら、そこで生きて、海がなくて、のんびり出来る所が良い!

B班

Yes! 子供がいないなら便利なほうかい。過去ばかり見ては前をすすめるない。

No! 生活を全て変換するのは、避けずるの。**No!** 地域内に商業センターをつくる必要も、少子高齢化で、つくりしものではない。

No! 生活を全て統合するのは、避けずるの。

「商業をやっている人は無理、沖だしするから」

「最近、山のほうに、コンビニが増えたからね」

○感謝(喜び)シートより!

- ・A君の意見が印象に残った。熱くなりながらも、とてもよい意見を発表していた。
- ・Yes-Noを出し合って、みんなの意見を出し合っけ。みんな真剣に考えていて、意見目録に発言しているのが印象に残った。

○B班 (Yes2名、No 6名)

Yes! 子供の安全を守る責任がある。

No! 戸建の家は田舎であること、産業がなくなる。利便性を求めるなら、隣市に住むが良い。そんなことは、どこにもある。

No! 高層ビルは費用で、でも、スーパーもコンビニがつかないから、生活がめんどくさい。

Yes! 生活は、バツバツ、役所からいふことは聞けないでいいから。

この質問自体、おかしい。(A君)

もとの風景・利便性・子の安全性への責任・・・

(極端な質問に対して)どうするか本音の話し合い。

○ ステップ1: 他県の集落をたずねた方にお話を聞こう！
自分達の地域との共通点は何か？ 実際の復興の道りを見た？

○ ステップ2: 他県警察や戸籍関係住宅を見学しよう
その集落を見下せる高台に降りた集落、地元の木材を使用し、建てられた一戸建のモダン住宅や長屋形式の公営住宅、みて、感じて、議論して。

○ ステップ3: 中絶の集落で大切だったことをもとに、声のなかづきについて再度考えをみる
「他の地域をみることで、自分の地域について気づくこともある」
「〇が埋まってしまいがちな、より主体的な関わりが復興、地域の産業などについても考えの機会となった。

**他の地域を知ること、自分の地域を客観的にみる機会に。
復興の道りを見ることで、具体の議論や前に進む力にも。**

```

graph TD
    Root[ふるさとづくり] --- T[つながり系]
    Root --- Ka[家系]
    Root --- In[印象系]
    Root --- Ko[後世へ]
    Root --- Ch[違い系]

    T --- T1[地域のコミュニティを活性化される]
    T --- T2[地域ごとの行事等を大切にする]
    T --- T3[近くの人たちとコミュニケーションをとれる場所をつくる]
    T --- T4[人と人とのコミュニケーションが必要だと思う]
    T --- T5[集まる場所をつくる]

    Ka --- Ka1[復興公営住宅が環境などを考えて建てられているし、その地域の材料を使っているし、といった、今後を考えていた。]
    Ka --- Ka2[風景などに合うような家のデザイン]

    In --- In1[雪が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。]
    In --- In2[緑が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。]
    In --- In3[雪が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。]

    Ko --- Ko1[自分たちの体験を外から来た人、これから来る若者などに伝えたい。]
    Ko --- Ko2[自分たちの体験を外から来た人、これから来る若者などに伝えたい。]

    Ch --- Ch1[復興への思いが強い。]
    Ch --- Ch2[故郷が好きという思いが強い。]
    Ch --- Ch3[故郷の事が好きで、できれば、はなれたいと言っている。]
    Ch --- Ch4[住民の方々の団結力が強い]
    Ch --- Ch5[村の人みんなが強いと思つた。]
    Ch --- Ch6[地域のつながりが強い。]
    Ch --- Ch7[人とのかつがりを大切にしている。]

    T --- T6[仮設住宅に住んでいる人が帰らないようにする]
    T --- T7[取り入れる]
    T --- T8[希望を失わせないように目標を立てる。]
    T --- T9[小さな目標から]
    T --- T10[地震前よりも住みやすくしようとした。]
    T --- T11[高齢者や障害者のために、バリアフリーの町づくりも重視する。]
    T --- T12[山古志の木を使い家を建てている。]
    T --- T13[その地域の特徴をつんだ復興が大事。]
    T --- T14[復興と復旧の違い]
    T --- T15[元に戻す→復興]
    T --- T16[新たに再建する→復興]
  
```

つながり系

- 地域のコミュニティを活性化される
- 地域ごとの行事等を大切にする
- 近くの人たちとコミュニケーションをとれる場所をつくる
- 人と人とのコミュニケーションが必要だと思う
- 集まる場所をつくる
- あまり村を愛さないようにしている。

家系

- 復興公営住宅が環境などを考えて建てられているし、その地域の材料を使っているし、といった、今後を考えていた。
- 風景などに合うような家のデザイン
- 山古志の木を使い家を建てている。
- その地域の特徴をつんだ復興が大事。

印象系

- 雪が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。
- 緑が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。
- 雪が多いが、寒さは変わらない。雪が多いとどうなんだろう。

後世へ

- 自分たちの体験を外から来た人、これから来る若者などに伝えたい。
- 自分たちの体験を外から来た人、これから来る若者などに伝えたい。

違い系

- 復興への思いが強い。
- 故郷が好きという思いが強い。
- 故郷の事が好きで、できれば、はなれたいと言っている。
- 住民の方々の団結力が強い
- 村の人みんなが強いと思つた。
- 地域のつながりが強い。
- 人とのかつがりを大切にしている。
- 仮設住宅に住んでいる人が帰らないようにする
- 取り入れる
- 希望を失わせないように目標を立てる。
- 小さな目標から
- 地震前よりも住みやすくしようとした。
- 高齢者や障害者のために、バリアフリーの町づくりも重視する。
- 復興と復旧の違い
- 元に戻す→復興
- 新たに再建する→復興

全校ワークショップ(10月)

第3回授業(2月)

内発的なプロセスを大切にする

検討を重ねることに、自然に「やってほしいこと」
→「地域でやってみたいこと」や、具体的な提案に変化。

分析・考察(1)

中学校の総合学習プログラムとしての意義

- 若い世代の復興まちづくりへの関心・参画を促す機会として「地域にとどまることができること」「地域外からかわれること」
 - 「地域に留まって、復興の力となる人材を」と決めつけず、若い世代の将来の夢やビジョンに寄り添いながら、「町の外から」「町の中から」復興にかかわれる機会を考える。(内発的なプロセスを大切に)
 - そうすることによって、本音で熱い議論をすることができ、友達の意見を聞いてそれぞれの考えを深められる。
- 復興まちづくりを考えるためのイマジネーション力を掘り起こす機会として学習とワーキングによる計画の変化の過程
 - 当初は、「○○が建ってほしい」といった意見が多かったが、ワークショップを重ねるごとに、具体的な地域の魅力を育てつつ、現実的に若い世代が住みやすい町について考えられるようになった。
 - 高校卒業後、町を出たい人は「いつまでもかわらない故郷像」を描き、町に残りたいと考える人は「若い世代が住みやすく集まってくるような、便利さ」を強く求める傾向がある。
- 他の事例を学び、自らの地域の復興を考える機会として
 - 他の地域を実際に見ることで、自分の地域の特徴や大切なことに気づく。
 - 具体的な復興の道のりを知ることの大切さ。

分析・考察(2)

集落移転を伴う復興まちづくり：若い世代が検討する意義

	大人の論点	十代（中学生）の論点
移動圏域人口減少	生活圏内（車）の内陸部への移動。住宅再建時期の見通しが立たないと、サラリーマン子育て世代の転居が加速。	将来の夢のため、高校卒業後、町を出たい（行き先は未定だが都市部）割合は高い。年に何回か帰る。（実家は町内に再建を前提に話している？）
復興への参加の機会	復興計画：比較的高齢の参加者が多い 住宅再建：世代にかかわらず説明会に参加 集落部話し合い：意思決定は財産区会員が中心（共有地）	参加方法は、町内で働く（消防士・町職員・エンジニア等）、復興の話し合い参加や、（特に町外から）ボランティア、地域行事参加など。参画のイメージがわからない人も。
地域への愛着・つながり	集落部は親せきのつながり非常に強い 漁村部は集落ごとの独立性が強い 漁業や関連産業を通じた産業つながり	地域への愛着は強い。小中の同級生のつながり。地域芸能・地域行事（特に祭り）の継続・伝承への意欲。「地域を出た人も集まれる日をつくる」自分の将来と町への愛着への葛藤
高台移転の是非論点	高台移転に関する反対はほとんどない（高台か内陸か？） 論点は①移転先の立地、②移転単位（集落ごと？統合？）③提供される土地面積・時期	集落を集約して商業施設などを誘致することには肯定的だが、過度な期待がせず、現実的。高齢者を集落で見守る大切さ（公営住宅の立地等）を指摘。生まれ育ち集落を知る人が地域復興に参画する大切さを指摘。
求めるまちづくりの傾向	①市街地と集落 ②漁業・関連産業か会社員か ③公営住宅を希望するか ④で、住宅再建希望時期、まちづくりの優先度が異なる	まちを出たい人は、震災前と変わらない故郷、まちに残る人は、道路や施設など利便性や若い世代や子育て世代が暮らしやすい利便性を求める傾向がある。
メモリアル施設等	防災庁舎をはじめとして、議論しにくい雰囲気。辛い思い出を忘れない	災害の伝承：比較的前向き。（町内の学校は未確認）

分析・考察(2)

集落移転を伴う復興まちづくり：若い世代が検討する意義

- 若い世代の復興まちづくりの参加に関する論点
 - ①世代の移動圏域と十代の移動圏域の違い
 - ②地域外に暮らす若い世代の地域との無理のない持続的なつながり、復興に関する活動への参加の仕組みづくり
 - ③若い世代の、家族・土地への愛着と、自らの将来を考える間での葛藤について議論する機会づくり
 - ④大人の理想像にとらわれない自由な発想を活かしつつ、事例や議論を重ねていくことで、議論が深まるプロセスデザイン
 - ⑤復興の多様性を知ることの重要性
 - ⑥復興の議論が「将来に向かって前にすすんでいく力になる」と広義の心のケアの効果

研究成果の活用（1） 他地域での活用

- 他地域でも使えるように、簡易実施ガイドブックにまとめていく
戸倉中学の事例をもとに作成。



ガイドブックのなかの1頁(例)

※ 今後は、地域性に合わせたオプションのプログラムなど、可変性のあるものも追加し、教育現場や地域のニーズにあわせて、教員や支援者がアレンジできるようなプログラムになるよう、改善していく。

※ 被害が大きく、まだ、復興まちづくりを考えられる状況ではない
学校には、「被災から現在までをふりかえる版」「これからの将来を考える版」も考えられる。

研究成果の活用（2）

事前復興まちづくり訓練での活用の可能性（今後の課題）

○ 復興まちづくり模擬訓練：現在までの取組みと課題

現在、東京都等で実施されている「事前復興まちづくり訓練」は、災害が起きて復興まちづくりの為に可能な限りの地域に留まって乗り切るよう、災害が起きる前に、地域の災害時の助け合いや、仮住まい、住宅再建を地域で考え、復興計画を考え、おくのを育てる訓練を行うプログラムであり、行政職員間と市民間がある。ただし、市民用も実際の参加者は、自治会の役員など、高齢者が多く、より多様な世代が参加するための工夫が課題となっていた。



○ 復興まちづくり模擬訓練：津波被災地の復興まちづくり版

津波被災地づくりでは、復興だけでなく、被災まちづくりにも活用される。
戸倉中の全校生徒ワークショップで行った「復興カレンダー」の議論をもとに、津波被害後の地域の復興について事前に地域で検討したり、現在の地域の津波被害に対する脆弱性をチェックして、中長期的なまちづくりの方向性を考える被災まちづくりに活かすプログラムをつくることが可能であり、今後、実践研究を通してついでにしていきたい。

○ 復興まちづくり模擬訓練：若い世代の参加版

広域災害や過疎地域など、災害を契機に震災前に暮らしていた地域から転出する世帯も多い。また、このような地域は、十代の若者が高校卒業後都市部に転出して多く帰郷しない。こういった地域で災害の発生が予測されている市町村で、若い世代に地域の将来について考えさせるきっかけとして、災害後の復興まちづくり計画を考えたまちづくりプログラムを実施することが有効であると考えられる。災害後の復興を考えることは、20～30年後を見通した地域像を考えることにもなるので、地域の世代間の対話の機会としても意義がある。